

第10回（平成20年度）囲碁大会 窪田秀治さん優勝

3月9日(月)に赤城倶楽部で、第10回となります平成20年度 囲碁大会を開催いたしました。今年度は、参加者が11名と盛況で、昼食を挟んで4対局を行い、その得点(何目差で勝ったのか負けたのかで得られる得点が違う)で順位を競いました。優勝した窪田さんは、4対局がすべて中押し勝ち(15目以上の差)という見事な成績でした。また、準優勝の鈴木さんは初めての入賞で、大健闘をされました。9時半から16時頃まで、楽しい1日を過ごすことができました。また、初めて大会に参加された方も2名いて、次回は更に参加者が増えて賑やかな大会になりそうです。賞品も1～3位のほか、中間賞、BB賞なども用意されております。来年も3月の第2月曜日に開催されますので、今回不参加の方も予定おきください。



成績上位の方は、次の通り 優勝 窪田秀治さん 400点(4勝0敗)
準優勝 鈴木庄一さん310点(3勝1敗) 第三位 星野安正さん 300点(3勝1敗)



【 会員投稿 】

小説家・吉村 昭 (その1)

伊沢 昭一郎

二・三年前のこと。菱の実会パソコンサークルで、幹事さんより「自分史」を書いてはどうかと言う提案があった。小生は自分自身のことを冷静に振り返ってみても、大した出来事はなく、人さまに語る価値がないように思えた。そこで「自分史」は興味がないので、『吉村 昭』の事典ごときものを作ろうかと思うと発言した。10人ほどのメンバー中に、吉村昭を知っている人がいた。彼が営業部員当時、部下に配属されたのが、昭氏の息子さんであった。親の経歴がいちいち配属先へ知らされることはないのだが、ちょっと有名人の場合、なんとなく洩れるのである。

別に親父が何様でも、息子の処遇が変わるわけではないが、個人情報漏洩などという言葉がない時代で、偉い小説家の息子ということは、部内の人達に知れわたったらしい。

しかし、この友人も、この偉い人の書は読んだことはなさそうで、その他のメンバーも無縁であったが、平成18年の夏の盛り、吉村氏が逝去された直後で、夫婦共々小説家であったこと・死際の特異な状況などがニュースとして伝えられていた。

特異な状況とは癌による膵臓全摘手術後、自宅療養中に長女へ『死ぬよ』と告げ、自ら点滴の管・首の静脈に埋め込まれたカテーテル等を引き抜き、数時間後に死亡したとのことである。享年79歳であった。

吉村昭の作品範囲ははなはだ広いが、清張や遼太郎ほど量は多くなく、又論ずる人もまだ少ないように感じられた。そこで「事典」などと言ったのだが、既に先人がいた。

まだ公刊された訳ではないが、私費出版により、氏に関するあらゆるデータの蒐集、(雑誌・図書・講演記録・カセット等々)そして、それらの目録が出来ていて、毎年追加・改訂されていたのである。

小生の老来目標はまたはかなく消えてしまったのだが、暫くは吉村昭とつきあうこととした。次回、その人となり、作品をご紹介します。

今月の四字熟語
・ ・ ・ 「一言居士」(いちげんこじ)

何事にも口を出さずにはいられない人。

論客

論士

議論好き

議論家

出しゃ張り

うるさ型

今月のことわざ・【二階から目撃】(にかいからめぐすり)うまくいかずもどかしいことのとたとえ。また、回りくどくて効き目のないことのとたとえ。

【 会員投稿 】

小説家・吉村昭 (その2)

伊沢 昭一郎

氏は昭和2年、上野に近い荒川区日暮里町に生まれ育った。実家は商家で、文学芸術に縁があるような環境ではなかった。大東亜戦争勃発の時は14才、中学2年生である。昭和1ケタ生まれのひとは総じて、子供の頃から支那事変等戦争が日常化しているなかで成長し、「兵隊さん」が男の子の憧れの的であった。子供心にいつか戦争に勝って、日本が世界の一番偉い国になるもんだと信じていた。

彼は昭和20年中学4年で繰上げ卒業し、徴兵検査は乙種合格、入営予定の1ヶ月前に、「ピカドン」とともに敗戦をむかえた。この瞬間から、憎むべき米英が、大いなる尊崇すべき存在に変わってしまったのである。

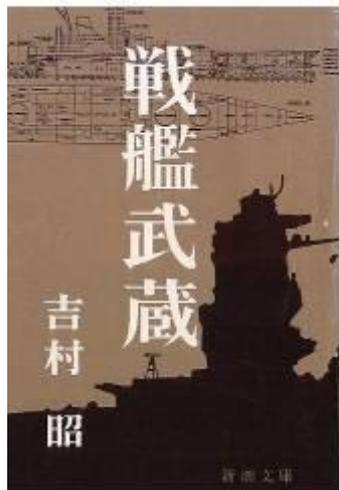
終戦の翌年、19才で、学習院高等科へ進学するが、肺浸潤がすすみ、60kgの体重が35kgになる等病状は悪化する。この頃、人々の栄養状態は極端に悪く、肺結核はストマイもパスもない状況で、いわゆる不治の病とされていた。23年、ドイツから輸入されたばかりの胸部成形手術(左胸部肋骨5本を切除)を受け、奇蹟的にも生還した。健康状態回復にともない、学習院大学へ入学、文芸部に所属して短編を発表するようになる。28年には卒業見込みがたたず、大学を中退、兄の紡績会社へ入社、学習院で同じ文芸部員だった津村節子(筆名)と結婚する。

勤めのかたわら、同人誌への投稿・創刊等文学への努力を続け、文芸春秋に掲載された短編が芥川賞候補にもなる。さらに、その後も数回候補になるが受賞には至らず落選が続いた。

彼が38才の時、同じ道を志す妻が芥川賞を受賞する。現在ほどいろいろな文学賞がない当時では芥川賞か直木賞を獲得することが、新人が文壇へ登場する捷徑であったのだ。これらの賞を獲得すると今まで世間的には無名の存在が一躍有名人名になり、ジャーナリズムに追い駆られるような状況にかわり、生活が一変するらしい。『どんな気持ちです。複雑なものでしょうね。』と知人に問いかげられることが、しばしばだったと自著に書いている。

だが報われる時がきた。昭和41年「星への旅」により、第二回太宰治賞を受賞、同年秋には「戦艦武蔵」が雑誌「新潮」に一挙掲載、単行本も刊行されてこれが大ベストセラーになる。

戦艦武蔵は戦前世界最大の排水量を持つ最強の戦艦として、「大和」と共に計起された。大和は海軍呉工廠で造られたが、武蔵は三菱重工長崎造船所で建造された。これの建造には4年強、秀れた頭脳・技術と莫大な資材と労力を消費したが、わずか2年で海底に没してしまう。時は既に航空機主体になっていた。



吉村昭は徹底した取材と綿密な考証を武器にいろいろな分野に挑戦する。戦記・戦史・医学・漂流・海洋・外交・動物・犯罪・歴史等々その範囲は広大で、『ひとりの人と思えない』との評を得る。日本芸術院賞・芸術選奨文部大臣賞等数々の文学賞を受ける作家になった。数多い作品のなかから、前記『戦艦武蔵』『破獄』、太田の人を書いた『彦九郎山河』を推奨したい。

<編集委員からひとこと>

伊沢さんの「吉村 昭研究」に刺激を受け、吉村 昭の本を読んでみました。史実と徹底した取材にもとづく物語にぐいぐいひき込まれ、すっかりはまってしまいました。スゴイです。読みごたえあります。まだでしたらぜひ触れてみては如何でしょうか。これまで読んだ中でとくに印象的だったのは「漂流」「破獄」「仮釈放」「高熱隧道」「闇を裂く道」「桜田門外の変」「零式戦闘機」「少女架刑」「透明標本」「鉄橋」などです。(篠崎)